

スポーツ観戦行動に関する研究 - トランスセオレティカル・モデルの応用 - A Study of Sports Spectator's Behavior ; Application of Transtheoretical Model

スポーツビジネス研究領域

5010A008-5 飯島 沙織

研究指導教員：間野 義之 教授

第1部 球技系トップリーグを対象としたスポーツ 観戦行動の変容ステージ

- 尺度の信頼性の検討およびスポーツ観戦 行動指標との関連による妥当性の検討 -

I. 緒言

笹川スポーツ財団(2010)の調査によると、過去1年間のスポーツ観戦経験者は33.5%、新規観戦希望者は39.3%であることから、既存の観戦者とほぼ同規模のマーケットが存在することが明らかとなっており、新規観戦希望者のスポーツ観戦を促進することが今後の課題の1つとなる。

消費者行動研究においては、様々な理論がスポーツに応用され、Mullinの消費者エスカレーターが注目されている。しかし、このモデルは、スポーツ観戦未実施者をさらに分類した「Nonaware noconsumer」「Aware noconsumer」を判断する明確な基準がないことが研究上の課題である。また、この分野では、潜在的な観戦者を対象に含んだ研究は少なく、スポーツ観戦未実施者を正確に分類する枠組みを提供する研究が必要であると考えられる。

一方で、行動科学の分野においては、習慣化された行動パターンを変える行動変容について数多く研究がされ、様々な習慣的行動の説明に利用されているトランスセオレティカル・モデル(TTM)が注目されている。TTMの中心的構成要素である行動変容ステージ尺度は、これまで課題となっていたスポーツ観戦未実施者も分類することが可能となり、行動が習慣化していく過程を理解することができる。

本研究の目的は、球技系トップリーグを対象としたスポーツ観戦行動の変容ステージ尺度の適応可能性を検討することとし、研究1で尺度の信頼性を確認し、研究2において妥当性を検討するため、変容ステージとスポーツ観戦回数やスポーツ観戦意図の関連を明らかにすることとする。

I. 研究1

1. 方法

平成17年の国勢調査の人口比率と均等比率にないように抽出した20歳以上70歳未満のモニターにインターネット調査を実施した。2010年11月(T1)に回答した210名に対して、最初の調査から2週間後(T2)に同じ尺度を用いて再調査を依頼し、166名から回答を得た。調査項目は、スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度、年齢、性別、就業形態とした。

2. 結果

スポーツ観戦行動の変容段階尺度の信頼性を検討するため、対象者166名に対する2度の調査で得られたデータから調査・再調査間のカッパ係数を算出した。その結果 $\kappa=.67$ という値が得られた。

III. 研究2

1. 方法

A市在住の20歳以上70歳未満(2010年4月時点)の個人を対象に標本調査を行った。住民基本台帳より、性、年代、居住区によって層化無作為抽出した5,000名を対象に、質問紙郵送法を用いて調査を実施した。回収期間は2011年1月25日～2月24日とした。回収結果は、配布数5,000通から配達不能等132通を除く4,868通の実配布数に対し、解析対象とする設問についての回答に不備のあった調査票を除外した結果、有効回答数は1,650通となった(有効回答率33.9%)。調査項目は、スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度、過去1年間のスポーツ観戦回数、スポーツ観戦意図、性別、年齢、就業形態を用いた。

2. 結果

妥当性を検討するため、独立変数をスポーツ観戦行動の変容段階尺度、従属変数に過去1年間のスポーツ観戦回数、スポーツ観戦意図とし、共変量に年齢、性別、就業形態を用いた共分散分析を行った。結果、過去1年間のスポーツ観戦回数、今後のスポーツ観戦意図の両項目において、有意な差がみられた[過去1年間のスポーツ観戦回数、 $F(7/1642)=231.7$, $p<.001$, $\eta^2=0.50$; 今後のスポーツ観戦意図、 $F(7/1642)=182.9$, $p<.001$, $\eta^2=0.44$]。

IV. 考察

研究1の尺度の信頼性に関して、本研究で得られた値は安定性の次元に関する信頼性はある程度確保されていると考えられる。

研究2の尺度の妥当性について、スポーツ観戦行動の変容ステージが後期になるにつれて、自己報告されたスポーツ観戦回数、今後のスポーツ観戦意図は増加しており、尺度の基準関連妥当性の一部が証明された。

よって、主に健康行動に応用されてきたTTMの中心的構成要素である「行動の変容ステージ」が球技系トップリーグを対象としたスポーツ観戦行動にも適用可能であり、信頼性と一部の妥当性を満たす尺度であることが明らかになった。

第2部 球技系トップリーグを対象としたスポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度の開発 - 信頼性の検討および妥当性の検討 -

I. 緒言

近年、Jリーグにおいては観客数の顕著な増加は確認されていないと報告されている一方で、1年間の平均観戦頻度が増加傾向にあることがわかる。これは、リピーター獲得には成功しているものの、新規の顧客を獲得できていないという現状が浮かび上がる。よって、リピーターの確保に加え、新規観戦希望者のスポーツ観戦を促進することが今後の課題の一つとなる。今後マーケットを拡大していくためには、既存の観戦者と潜在的な観戦者とのスポーツ観戦行動に影響する心理的な要因の違いを明らかにする必要がある。

人々の行動を促進させる方法として、近年行動科学を用いた手法が注目されている。TTMにしたがって、ある行動を採用し継続するように行動が変容すれば、TTMの中心的構成要素である行動変容ステージに伴って、その他の構成要素である行動変容の過程、意思決定のバランスおよびセルフ・エフィカシーが変化することが明らかにされている。特に、初期の3段階で意思決定のバランスがステージ移行の予測因子となることが示唆されている。

本研究では、意思決定のバランスに配慮したスポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度を開発し、スポーツ観戦行動の変容ステージ尺度を用い、ステージの違いによる促進要因・阻害要因得点との関連を明らかにすることを目的とする。

II. 予備調査

1. 方法

予備調査として、便宜的に抽出した大学生および大学院生計20名を対象に半構造化インタビューを実施した。調査内容は「スポーツ観戦に行く目的・理由は何か」、「スポーツ観戦に行かない、または行けない理由は何か」の設問について回答を求めた。専門家との協議の結果、促進要因・阻害要因各18項目を、プレ調査の測定項目として採用した。

III. プレ調査

1. 方法

既存の社会調査会社に登録する20歳以上70歳未満のモニターを平成17年の国勢調査の人口比率と均等比率になるように層化した上で205名を対象として抽出し、2010年11月にインターネット調査を実施した。調査項目は、予備調査で得られた各18項目を設定した。

分析は、探索的因子分析を行った後、探索的因子分析によって想定された仮説モデルに対して確認的因子分析を行った。統計解析パッケージはIBM SPSS Statistics18 およびAmos19を使用した。

2. 結果

各18項目において探索的因子分析(主因子法、バリマックス回転)、共分散構造分析の結果、モデル適合度は十分に受容できる値にならなかった。再度協議を重ね、促進要因・阻害要因各10項目を採用した。

IV. 本調査

1. 方法

A市在住の20歳以上70歳未満(2010年4月時点)の個人を対象に住民基本台帳より、性、年代、居住区によって層化無作為抽出した5,000名を対象に質問紙郵送法を用いて調査を実施した。回収期間は、2011年1月25日～2月24日とした。回収結果は、配布数5,000通から配達不能等132通を除く4,868通の実配布数に対し、解析対象とする設問の回答に不備のあった調査票を除外した結果、有効回答数は1,386通となった(有効回答率28.5%)。調査項目は、スポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因尺度、スポーツ観戦行動の変容ステージ、年齢、性別、就業形態とした。分析は、プレ調査と同様に行った。

2. 結果

各10項目を用い、因子負荷量0.4以上を基準として探索的因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った結果、促進要因・阻害要因ともに10項目5因子(各因子:2項目)となった。

共分散構造分析の結果も、促進要因・阻害要因ともに10項目5因子でのモデル適合度において基準を満たす値(促進要因:GFI=.987, AGFI=.972, CFI=.992, RMSEA=.043, 阻害要因:GFI=.977, AGFI=.949, CFI=.980, RMSEA=.065)になった。

スポーツ観戦行動の変容ステージとの関連をみたところ、促進要因得点において無関心者よりも潜在観戦者、観戦者が有意に高く、阻害要因得点においてステージが上位になるにつれて有意に低くなることが明らかになった[促進要因, $F(4/1386)=63.8$, $p<.001$, $\eta^2=0.16$; 阻害要因, $F(4/1386)=81.2$, $p<.001$, $\eta^2=0.19$]。各因子では、促進要因では、「気晴らし」「交流」「ファン」「ライブ効果」において、無関心者と潜在観戦者、観戦者で有意な差がみられ、「ムード」において、ステージが上昇するにつれて有意に得点が高い結果となった。阻害要因では、「無関心」「社会的支援の欠如」「時間の管理」「金銭的価値」において、各ステージ間に有意な差がみられ、「物理的環境」において有意な差がみられなかった。

V. 考察

尺度の信頼性の指標であるCronbachの α 係数を算出した結果、0.75以上となり十分に高い値を示した。さらに確認的因子分析の結果から、モデル適合度を示す値はすべて受容できる値となり、構成概念妥当性も確認され、本研究で開発した尺度はスポーツ観戦行動の促進要因・阻害要因を測定する上で、要件を十分に満たしていると考えられる。